

アーカイブズ

# ARCHIVES

沖縄県公文書館だより 第7号

1998年3月1日発行

## 南米移住者募集

**移住国**

ペルー  
ボリビア  
ブラジル  
アルゼンチン

①回 8月20日  
②回 12月10日

募集締切

- 1 ボリビア移住者
- 2 ブラジル雇用契約移住者
- 3 ブラジル移民青年隊
- 4 アルゼンチン移民青年隊

▲ 申込は市町村役所へ

### 琉球政府経済局

南米移住者募集ポスター（琉球政府文書「南米移住国移住地地図」）

特集：沖縄移民史をよむ

## 特集 沖縄移民史をよむ

移民県といわれる沖縄県。現在、海外各地に居住する約250万人の日本人移住者および日系人のうちの約30万人が沖縄県系人といわれています。沖縄県における海外への移民は、1899（明治32）年のハワイへの契約移民から始まりました。戦前、戦後を通じて、沖縄県は南米を中心に数多くの移民を送り出してきました。戦後においては、激増する人口対策としての米国民政府（USCAR）と琉球政府による計画移民、そして土地を軍用地として接収された人々の移民も行われました。

今回は、琉球政府文書および琉球政府刊行物の中から政府計画移民として推進されたポリビア移民関係資料等を中心にご紹介します。

### 戦前の沖縄における移民の開始とその経緯

金城 功（沖縄大学教授）

沖縄の移民を語るには「移民の父」と言われている当山久三に触れなければなるまい。東京で生活している時に移植民に関する本にふれ移民事業に関心を抱いたという。一八九九年（明治三十二）に帰郷した彼は間もなく移民事業に取り組むことになった。

当時沖縄は旧慣温存の時代であり、本土の諸制度が十分には適用されてない時であり、当山は移民事業を推進する上で苦労したという。知事の許可を得るのに苦労し、移民募集の妨害にあい応募者を集めるのに苦労し、旅費の調達に苦労した。従兄弟を説得し、実弟も参加することになり、一八九九年の暮にハワイへの第一回移民を送り出した。が、本土からは既に多くの移民がハワイに渡航していたのである。

第二回目の移民送り出しは、一九〇三年（明治三十六）であった。それも当山によって募集された移民であった。

初回が二十七人であったのに対し、二回目の一九〇三年（明治三十六）は九六六人、一九〇四年（明治三十七）には八四五人、一九〇五年（明治三十八）には一六二〇人と急増し、一九〇六年（明治三十九）には何と移

民史上最高の四六七〇人が移民として渡航している。本土に遅れての移民の開始であったが、開始されるや移民は急増し沖縄は有数な移民県になった。

移民の増加と共に移民先の国も増えていった。ハワイ、フィリピン、ニューカレドニア、メキシコ、米国への移民が制限されると南米の国々、カナダへと移民国を拡大していった。年により移民の募集条件に差異があったが、ハワイ・南米への移民となるとそれ相当の金子が必要であった。その金子を土地を処分（質入れ、売却等）することによって得ることもあったということである。一八九九年（明治三十二）から一九〇三年（明治三十六）に行われた土地整理によって農民は土地を私有することになり、土地を処分する自由を得たことにより移民を希望する者にとって大いに役立つこととなった。

沖縄から多くの移民が析出されたのは何に起因するのだろうか。他県に遅れて移民をスタートさせた沖縄が有数な移民県になったのは、移民を送り出さざるを得なかった社会経済的背景があったことによる。移民した個々人にはそれなりの

理由があった筈であるが、移民析出の最大の要因は沖縄が経済的に貧困であった、ということだと考えている。糖業を含めた農業以外にそれとあった産業の発達がなかったために、析出される若い人々の労働力を吸収する場がなかったために農業に従事してはいたが、若い人たちは働く場、稼ぐ場を求めていたのである。そのような社会状況にある中に移民の情報が流れると、人々は一攫千金を夢見て移民募集に応募したことになる。県外への出稼ぎも同じ状況であったと考えている。

沖縄からの移民は送金のため、そして五、六年から七、八年もすれば錦衣帰郷するという夢を抱いていたために、なりふり構わずに働いたという。そのことが響（こた）を買いブラジルでは沖縄からの移民禁止という措置がとられたことがあった。他県からの送り出しが出来た間は移民取扱人にとって沖縄は蚊帳の外におかれていたが、ブラジルへの移民の応募が減ってくると移民取扱人は沖縄へと目を向けることになった。政府の許可を得て沖縄での募集を再開すると、多くの人たちが応募することになった。沖縄にはいつも移民に応募する人たちがいたことになる。それはとりもなおさず沖縄の社会経済的な状況が移民を送り出す状況にあったことになる。

# 沖縄県人の海外移民史年表

1899 (明治32)	(12.5) 当山久三らの斡旋によるハワイ契約移民27人が出発。沖縄最初の移民		龍江省へ入植
1903 (3.15)	金武間切出身者45人がハワイへ出発。当山久三が事情視察のため同行	(12.8)	太平洋戦争勃発により海外移住中絶
	米合衆国へ移住者51人が渡航 (その殆どが修学、学術研究を理由とする)	1945	この年からハワイ、アメリカ、南米各地の県人によって戦災沖縄救援運動始まる (~1951)
1904 (4.1)	沖縄県訓令甲第二十号公布、修学渡米者を規制	1948 (10.22)	沖縄海外協会再発足 (→琉球海外協会 (1953) →社団法人沖縄海外協会 (1961) と改称)
	(4.10) 当山久三の斡旋 (帝国殖民合資会社) によるマニラ移民111人が出発 (大城孝蔵同行)	1949	戦後初めてアルゼンチンへ呼寄移住が再開される
	(6.22) 第1回メキシコ・エスペランザス移民として202人が出発	1950	この年、アルゼンチンへ移民118人が出発
1905	仏領ニューカレドニア島へ387人が渡航	1951 (1.)	この年、アルゼンチンへ移民303人が出発
1906 (10.16)	初めてペルーへ契約移民36人が出発	1951 (10.)	沖縄群島政府経済部に移住係設置
	(11.25) ホノルルで在布沖縄県人会結成		米・スタンフォード大学のジェームス・L・ティグナー博士が中南米諸国の沖縄人移住地を調査 (~1952.9) (琉球政府『ティグナー報告書』1957 ブラジル編、1959 後編)
	この年、ハワイに4,467人、北米・メキシコに92人、ペルーに111人の移民出発。この年最高の移民数 (全国的傾向)	1952 (4.1)	沖縄海外協会機関誌『雄飛』発行
1907	初めてカナダへ152人が移民。この年業務代理人をおいて移民の募集業務をおこなった移民会社の数は22社	1953 (4.1)	琉球政府創立、総務局に移住課設置
	ハワイ移民、日米紳士協約により呼寄移民に限定	(6.18)	移民課、社会局に移管
1908 (1.)	米・南カリフォルニア沖縄県人会結成	1954 (3.23)	ボリビア国、大統領指令第57311号発布。うるま移住組合代表者ホセ赤嶺の農業移住計画 (10年間、3,000戸、12,000人) を承認した
	(4.28) 第1回ブラジル移民325人が出発	(4.)	ボリビア農業移住者募集要綱制定
	英領オーシャン島へ沖縄県人252人が渡航	(6.19)	海外移住金融のために移住金庫が設立される
1912 (大正元)	英領シンガポールへ25人が移民 (追込網漁業)	(7.18)	ボリビア移住団第1陣269人出発
	第2回ブラジル移民421人が渡航	(10.)	ボリビア移住団第2陣129人出発
1913	外務省が沖縄からのブラジル移民を禁止 (1917年解禁)	1957 (7.11)	ボリビア国うるま耕地に病疫 (罹患者148人うち死亡者15人) 発生 (~1955.4.)、及び洪水災害
	蘭領ジャワへ5人が渡航 (追込網漁業)	1960 (7.1)	伊佐浜移住者ブラジルへ出発 (無縁故者移住第1号)
	呼寄で初めてアルゼンチンへ14人が移民	1961 (8.1)	琉球海外移住公社が新設され、移民金庫が解散した
1915 (11.)	糸満出身の玉城其ら17人がサイパン島で追込網漁業を開始	1963 (7.1)	経済局に移住課が移管され、移住あっせん所及びボリビア移住地駐在所が新設される
1916 (7.)	フィリピンより女性3人が入れ墨のために送還される (在留県人会の決議)	1965 (8.1)	海外移住事業団設立
1917 (1.24)	布哇沖縄県人同志会結成	1967 (6.30)	移住課、農林局へ移管
1918	ブラジル移民、最多の2,204人		琉球政府移住あっせん所及び琉球海外移住公社が廃止される
1919	外務省、再び沖縄からのブラジル移民を規制 (1926年解禁)	(7.1)	海外移住事業団沖縄事務所が開設される
	初めてボリビアへ1人が移民	(9.14)	沖縄海外移住家族連合会が発足する
1921	初めてセレベスへ7人が移民	1969 (2.)	戦後初めてパラグアイ国へ開拓移住者として14人が出発
1922	ペルーでカリヤオ日本人会結成	(8.16)	琉球政府、海外移住者を奨励、移住者への奨励金制度を実施
1924 (11.17)	沖縄県海外協会設立	1971 (9.25)	移住課が廃止され、農政課の海外移住係となる
	ペルー移民、自由及び呼寄移民となる	1972 (5.15)	移住課が廃止され、農政課の海外移住係となる
1925	沖縄県海外協会機関誌『南鷗』発行	1973 (2.14)	日本復帰、沖縄県となる
1926 (3.28)	布哇沖縄海外協会創立		移住者船舶輸送の最終船、日本丸 (旧あるぜんちな丸) 横浜出航
1927	移民収容所設立 (神戸・横浜) (1929年に移住教養所に改称)	(6.1)	総務部渉外課外事移住係を、移住課と外事課に分離
1934 (6.11)	移民の教育・船待滞在施設、開洋会館落成	1989 (3.31)	沖縄海外協会解消
	(11.6) 米・ロサンゼルスで在米沖縄県人会結成		(※現在、海外移住および関係団体に関する業務は、総務部国際交流課が行っている)
1936 (4.)	県保安課、県人の姓名が難解として海外移民の呼称を統一		
	(11.) 県当局、海外渡航者を選挙人名簿から削除		
1937 (4.)	糸満小学校に移民科と水産科を設置	(参照文献)	
1938 (9.)	国及び県の募集で南洋特別土木作業夫196人が渡航	田港朝和	1980「沖縄移民史年表」『新沖縄文学』
1940 (5.12)	第1回満州開拓農民先遣隊出発		沖縄タイムス社
1941 (3.1)	県立沖縄拓南訓練所 (金武村)、附設糸満拓南訓練所 (糸満小学校) 開設	沖縄県教育委員会	1976『沖縄県史』1通史
	(3.21) 大陸開拓先遣隊 (南風原、恩納、今帰仁より)	琉球政府	1968『海外移住への道』

## 琉球政府文書にみる戦後移民

「ボリビア移民関係資料を中心に」  
 雨宮 和子（米国日本政策研究所研究員）

私は一九九七年五月末から十一月までの間、戦後ボリビア移民計画の形成過程と実行後の状況について調べて回り、沖縄やボリビア、ブラジルで実際に移民された方々からお話を伺うと同時に、沖縄県公文書館でスタッフの方々の協力と指示を得ながら資料調べをさせて頂きました。戦後ボリビア移民計画はボリビアでの戦前移民が「うるま移住組合」を結成して琉球政府に提案したことからは始まったのですが、そのことに関する貴重な資料には、「うるま移住組合」の琉球政府に対する働きかけの手紙〔1953年4月起 移民関係文書抜粋書〕、移民受け入れ準備経過報告〔ボリビア関係書類綴、1953年4月起 移民関係文書抜粋書〕、移民開始後のボリビアでの報告〔1953年4月起 移民関係文書抜粋書、1953年～1959年 移住促進に関する書類、海外移住に関する参考資料、移住者保護に関する書類〕、USCARとの連絡文書〔1953年～1959年 移住促進に関する書類、移住者保護に関する書類〕等々があります。見つかって特に嬉しかったのは、「軍用地立退者を海外へ移住させるについて」という文書〔1953年

1959年 移住促進に関する書類〕と移住地の様子を示す写真〔南米各地移住地写真〕です。写真は未整理のまま箱に入っていますが、ボリビア現地でももう手に入らないものが多く、昨年夏に複写してボリビアへ持っていきましたら、移民の方々に喜ばれました。

琉球政府発行の南米移民促進のための刊行物である『南米移住への道』(1953年)や、報告書である『情報』〔海外移住に関する資料 個人資料 (松堂、玉城)〕が、琉球政府農林局や経済局の移住課のファイルを中心に保存されています。移民に関する琉球新報や沖縄タイムスの記事や社説の切り抜きも、年が限られています。スクラップ・ファイルとして集められており〔八重山開拓移住者参考資料集(新聞記事抜粋)、新聞切り抜き記事〕、検索の出発点として便利です。ボリビアの新聞がオキナワ移住地を報道した記事の切り抜きも、若干あります〔移住地調査に関する書類 ボリビア〕。なお、私は目を通しませんでした。移民関係の資金出資の面から移民状況を把握しようとするならば、ボリビア移住地駐在所の帳簿が会計検査院の

ファイルとして保存されています。残念ながらボリビア側の移民発案に応じた沖縄側の文書や移民計画形成過程を記録するものが公私とも不十分で、移民計画実施の始まったころの送り出し側の資料も断片的ですが、これは当時どこでも資料保存が積極的に考えられていなかったことに起因しており、どこの公文書館でも共通して抱えている問題のようです。もともと、昨年寄贈された稲嶺一郎氏資料の中にボリビア移民に関する書類がいくつかあります。たとえば、稲嶺氏のアメリカとの通信文書、海外移民協会や移民懇談会の記録、稲嶺氏自身の海外移民に関する



ボリビア・コロニア沖縄入植10周年記念祭 (1964年)  
 (南米各地移住地写真(R00054234B))

新聞記事切り抜きや写真などがあります。稲嶺資料が整理され、また各市町村が保存している資料の所在地が体系的に把握されて相互連絡の体制ができあがれば、移民に関する資料調べは能率が急上昇するだろうと期待しています。現段階でも、閲覧室や史料編集室のスタッフの方々が現在把握している範囲での検索はもちろんのこと、資料の所在場所や関係文書についても可能性を徹底的に追求してくれそうですので、できるだけ焦点を絞って探究を続けられることをお勧めします。

- ・1953年4月起 移民関係文書抜粋書 (R00054243B)
- ・ボリビア関係書類綴 (R00054212B)
- ・1953年～1959年 移住促進に関する書類 (R00053762B)
- ・海外移住に関する参考資料 (R00054231B)
- ・移住者保護に関する書類 (R00053852B)
- ・南米各地移住地写真 (R00054234B)
- ・海外移住に関する資料 個人資料 (松堂、玉城) (R00054236B)
- ・八重山開拓移住者参考資料集 (新聞記事抜粋) (R00058262B)
- ・新聞切り抜き記事 (R00054228B)
- ・移住地調査に関する書類 ボリビア (R00053850B)

※カッコ内は当館の資料コードです

## 移民(海外・域内)に関する

### 資料について

#### 琉球政府文書

当館収蔵の移民(移住)に関する琉球政府文書は八〇〇件近くあります。その多くは農林局、および会計検査院の文書です。

一般的に移民といえは海外移民が想像されますが、当館の移民資料の中には、域内移住(註1)に関する文書も含まれています。海外移民に関する文書のほとんどは農林局移住課、また域内移住に関する文書は主に農林局耕地課や八重山農林土木事務所の文書として保管されています。

#### 琉球政府刊行物

海外移民に関する琉球政府刊行物は『テイクナー報告書』(註2)(ブラジル編一九五七、後編一九五九)や『南米移民地調査報告書』(一九五七 玉木芳雄等報告)、『南米移住地事情』(一九六一 新里文徳の調査)等があります。

詳しくは閲覧室職員におたずね下さい。

(註1) 沖縄群島政府(一九五〇年十一月～一九五二年三月)は、一九五一年五月に群島政府移民計画を打ち出し(琉球臨時中央政府と沖縄、宮古、八重山の三群島政府の申し合わせにより策定)、宮古、八重山諸島を含む島内の移住(域内移住)を推進しました。

(註2) ジェームス・L・テイクナー博士による南米調査報告書。『The Okinawans In Latin America (A 四判、六五六頁)』を大城真順が翻訳したもの。



ポリビア・うるま病犠牲者の墓(年代不明)  
(南米各地移住地写真(R00054234B))



国、年代等不明  
(南米各地移住地写真(R00054234B))

### こんな資料もあります…ポリビア移住者の住居について

堅苦しいものと思われがちな行政文書。しかし、中には当時の人びとの生活を伝えるものがあることをご存知ですか？琉球政府経済局移住課(農林局移住課へ引継)が作成した『1963年2月～移住地調査に関する書類(ポリビア)』(R00053850B)もそのひとつです。この簿冊には、1962年から2年間、琉球政府からポリビアのサンタクルス州沖縄移住地に派遣された、ある医師の報告書が綴られています。その中から、当時の移住地における住居の一般的状況を伝える「移住者住居の問題点」の一部をご紹介します。

#### 屋根

「モーター椰子(註)の葉で葺かれてあり、天井がないため、寝室、食堂から露出した屋根裏が見え、その屋根には、鼠族が好んで果をつくり、……。」

#### 壁

「大部分は粗面のまつの板を張るか、又は、ピンロー樹を薄く割いてつくった粗材を張ってあり、寒い南風(スール)が吹くと、昼間は戸外の塵埃が壁の隙間から吹き込み、夜間は寒気のため、休息が妨げられる場合が多い。……壁に隙間が多く、……吸血昆虫の室内侵入は夥しいものがある。」

#### 炊事場

「直方形の住居内の一方の端にカマドが二つ三つ、通常土で造られてある。炊事場に直接する外部に飲水のタンク(普通ドラム缶)が設置され、炊事に使用される。炊事場の煤煙は直接、食卓、居間(寝室)に流れ込む。」

(註) ニッパヤシ



カーライル・バラックス

ペンシルバニア州フィラデルフィアの近くにカーライルという小さな町があり、そこにカーライル・バラックスがある。バラックスとは兵舎の意味だが、昔そこはインディアンの学校であったそうで、それを兵舎に転用したことか

らいまだにそう呼んでいるのであろう。いまそこには陸軍大学と陸軍歴史研究所(U.S.Army History Institute)がある。

その研究所には陸軍大学の卒業生たちが残っていた沖繩関係論文が数十件あるが、何と言ってもその魅力は退役将軍たちのオーラル・ヒストリー(Oral history)だ。現役の佐官級の軍人(おそらく陸軍大学の教授)たちが将軍たちの生い立ちから退役するまでの履歴を詳しくテープに録音したものを。研究所ではテープからおこしたものを見せてくれる。もちろん、かつての琉球の帝王・高等弁務官たちの証言もある。第二代弁務官ドナルド・P・ブリス中将



を除いて、初代のムーア、三代目のキャラウェイ、四代目のワトソン、五代目のアンガー、そして最後のランバートの五人のオーラル・ヒストリーがある。

弁務官制度が実施されたのが一九五七年だから、それ以前の軍政長官、民政長官や民政副長官たちの証言もある筈であるが、弁務官たちの証言がみつかったことで頭がいっぱいになり、そのことを確認するのを忘れてしまった。惜しいことをしたとい

までも思っている。たとえば、軍用地問題が「鳥ぐるみ闘争」に発展した時期に民政長官であったレムニッツァー大將の証言が入手できれば軍用地問題の知られざる部分に光を当てることができるかもしれないのだ。機会があればその辺のことを調べてみたい。

ともあれ、弁務官たちの口述回顧録を読んで印象に残ることを一つだけあげると、沖繩の人は「日本人ではない」か、もしくは「異なった存在」(変な日本人?)として映っていたようである。しかし、在任中それを公的な場で口にするにはなかつた。

館長 宮城悦二郎

公文書館ってどんなところ?⑤

～地域資料収集・整理担当篇～

沖繩県公文書館では、古文書、档案資料、沖繩関連資料を総称して地域資料と呼んでいます。この三種類の資料についてそれぞれ説明していきましょう。

古文書…廃藩置県以前に作成された文書

現在、公文書館に収蔵されている古文書は少数ですが、中には「渡地村参文書扣」(岸秋正文庫)のように貴重な文書があり、現在整理がすすめられているところです。

档案資料…琉球王朝と清時代の中国との間で取り交わされた外交文書

原資料は北京の中国第一歴史档案馆(日本の公文書館にあたる機関)に保存されています。当館では200点ほどがレプリカで保存され、マイクロフィルムで閲覧に供されています。

沖繩関連資料…沖繩の歴史に関わる図書、沖繩で発行された新聞、沖繩と深く関わった人物の所有していた資料

当館に収蔵されている地域資料中、最も多い資料群で、そのほとんどが個人からの寄贈によるものです。移民関係資料、戦後沖繩の世相を現す資料、波乱の琉球政府時代に生きた元行政主席所蔵資料など多様な構成になっています。形態も図書、文書はもとより、写真、メモ、映像資料など、多岐にわたっています。

収集された地域資料は、公文書館選別基準に則って選別され、必要に応じて修復などの処理を施し、登録した後、書庫に保存されます。整理された公開可能な資料は、各々の性質、保存状態により、原資料、複製本、マイクロフィルムのいずれかで閲覧できます。

(公文書専門員 垣花優子)

特別展

「沖繩へのまなざし」  
— 岸秋正文庫の世界 —

後期展示を見て利用アンケートから

沖繩関係文献の蒐集家として研究者の間で高名であった故岸秋正氏。その貴重なコレクションが、昨年一月に夫人の朝子氏より当館へ寄贈されたのを記念して、特別展が前・後期に分けて開催されました。

前号では、前期展示の利用者の声をご紹介しました。本号では、後期展示の利用者の声をご紹介します。

後期展示の構成内容

○琉球・沖繩学の系譜

(伊波普猷をはじめとする沖繩学研究者の論文掲載雑誌)

○自然関係稀書

(気象や植物関係の公文書及び研究誌、ラサ島関係資料)

○近代沖繩の文学者たち

(山口鏡・伊波南哲をはじめとする文学者の詩文)

○行政資料にみる沖繩の近代

(旧沖繩県が発行した糖業や教育等に関する報告書及び統計書等)

感想アンケートより一部抜粋)

◇膨大な資料の内容の深さに感動しました。岸秋正氏の情熱が強烈に

伝わってきて素晴らしかったです。

◇岸さんという方がいたとは存じませんでした。琉球・沖繩関係の古書・重要書の保持者は、現在でも知られていない方がいるのだろうと感じました。

◇これだけの大変多方面にわたる貴重な資料を選別・収集された(岸秋正氏)お心の中には、深い深い人間愛があったものと拝察いたします。

◇方言訳の本(「沖繩対話 上・下」)が面白い。地図(「那覇市勢要覽 昭和十二年版」)も、行政区の変わりが見られた。

◇先人の偉業がこのように大切に保管されていたことに、とても感銘を受けました。後日、是非閲覧してみたいと思います。

声

史料管理学研修会報告

平成九年十一月十日より同十五日まで、当館講堂において史料管理学研修会(短期)が行われました。これは、国文学研究資料館史料館の主催で、記録史料の収集、整理、保存、利用等に関する最新の専門的知識、技能の普及を目的に、毎年行われているものです。通算四三回目となる今回は、沖繩が開催地に選ばれました。県内外から参加した三七名の研修生は、「文書館総論」、「記録史料論」、「記録史料管理論」等の講義を受け、沖繩県公文書館を視察見学しました。

同研修会には他に前後八週間におよぶ長期過程もあります。長期・短期いずれの研修会も記録史料を取り扱う業務に従事している人か、大学院在学中又は大学卒業以上の学歴を有し、史料管理学に強い関心を持つ人が対象となります。史料管理学研修会に関する詳しい情報は、国文学研究資料館史料館までお問い合わせ下さい。

国文学研究資料館史料館  
東京都品川区豊町一―一六―一〇  
(電話)〇三―三七八五―七三―  
(代表)

特別展期間の来館者数  
( ( )内は1日平均)

前期 (8/1~8/24)	748人 (39.4人)
後期 (8/30~9/28)	737人 (30.7人)

短期研修会日程(沖繩会場)11/10~11/15

10(月)	開講式 現代の文書館とアーキビストの役割 (森安彦) 国際化と文書館 (宮城悦二郎・A. P. ジェンキンス)
11(火)	記録史料論Ⅰ(丑木幸男) 記録史料論Ⅱ (糸数兼治・仲本和彦・宮城保)
12(水)	官公庁文書の評価と移管(豊見山和美) 沖繩の歴史史料(比屋根照夫) 沖繩県公文書館における史料管理 (宮城保・富永一也)
13(木)	史料の整理と目録編成(鈴江英一) 文書館とコンピューター(山田哲好)
14(金)	史料の保存環境と劣化損傷の予防 (青木睦) 劣化損傷史料の保存修復 (宇佐美直八・宇佐美直秀・田中保)
15(土)	史料の利用と普及活動(安藤正人) 総合討論(安藤正人・青木睦)

(カッコ内は講師名)

## 第三回沖縄県公文書館講座のお知らせ

沖縄県公文書館では、《戦後沖縄文化の諸相》と題して、毎週木曜日に講座を開講しています。

苦難の時代の中で、人びとは沖縄の伝統文化を甦らせ、育み、復興の活力としていきました。戦後沖縄の文化を、衣・食・住・芸能・音楽・スポーツそれぞれの側面から再考します。入場料は無料です。全八回（第六回まで終了）。

**場所** 閲覧棟一階 講堂  
**時間** 午後六時三十分～八時



第5回講座「沖繩芝居～よもやま話～」  
講師：真喜志康忠氏（2月19日）

三月五日（木）

【第七回】戦後沖縄のスポーツ〔1〕

高校野球

講師 栽弘義氏（沖縄水産高校野球部監督）

三月十二日（木）

【第八回】戦後沖縄のスポーツ〔2〕

ボクシング

講師 金城真吉氏（那覇市消防本部司令補）

## 講演会のお知らせ

日時 三月十三日（金）午後三～五時

場所 閲覧棟一階 講堂

演題 何を、なぜ、誰のために

— 史料保存の重要性を考える —

（仮題）

講師 高野修氏（元藤沢市文書館館長）

## 利用案内

開館時間 午前九時～午後五時

休館日 月曜日、祝祭日

利用方法

- ・初めて利用される方は、「利用証」の交付を受けて下さい。書庫内の資料を閲覧する時には「利用証」が必要です（交付の際に身分証明書が必要になります）。
- ・参考資料室の資料は自由に閲覧で

きます。

・利用者用端末で検索し、閲覧を希望する資料が書庫内にある場合は、「利用証」の番号を入力して「閲覧申請書」を作成し、受付カウンターに出して下さい。

・資料の複写をご希望の方は、受付までお知らせ下さい（一枚二〇円）。

・疑問な点がありましたら、お気軽に係員にご相談下さい。

## 交通のご案内

那覇交通（株）  
市内線1番、12番  
東陽バス（株）  
91番、96番  
新川バス停下車



## 表紙の説明

### 南米移住者募集ポスター

琉球政府経済局移住課（1961.8.1～1965.7.31）が作成した南米移住者募集ポスター。サイズは、タテ78.8cm×ヨコ53.5cm。1963年6月に発行されたものと思われる。海外への移住者は、1961年以降、減少の一途をたどった。

## 編集後記

（海外）移民に関するレファレンスは増加する傾向にあります。移民問題は、沖縄の戦後史を考える上で重要な政治・経済・文化などの様々な側面とリンクしています。例えば、琉球政府による計画移民は軍用地問題とも関係があるので、こういったことも、人びとの関心を移民問題へと向けさせている要因のひとつになっているのかもしれない。沖縄における移民を考えるとき、それは極めて今日的な問題であることに気が付かれます。

今回の特集が移民研究への一助となればと思います。

アーカイブズ 沖縄県公文書館たより 第7号  
平成十年三月一日発行  
編集発行  
**沖縄県公文書館**  
〒901-1105  
沖縄県南風原町字新川一四八―三  
電話（〇九八）八八八―三八七五  
FAX（〇九八）八八八―三八七九